3 月第 2 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 3 月 12 日（日）10：30－11：30　受難節第 3 主日

■説　教： 保科けい子 牧師

■説教題：「 自分の十字架を背負って 」

■聖　書：ルカによる福音書 9 章 18～27 節（新約 p122）

■讃美歌：3「扉を開きて われを導き」294「ひとよ、汝が罪の」

昨日の 3 月 11 日は、東日本大震災 12 周年記念日でした。12 年前の 3 月 11 日は金曜日でした。その日、私は午後 2 時から母校の東京神学大学の卒業式に出席しておりました。学長が告辞をなさっている時に地震になりました。少し中断の後、式次第通り進行し、教団議長の励ましの辞が終わり、そして、私の励ましの辞のときに第二震がきました。今度はさすがに礼拝堂の両サイドの窓が開けられ、後ろのドアから多少は外に出られた方もいらしたようです。けれども、私もほんの少しだけ話を中断しましたが、「卒業生の皆様にとっては生涯忘れられない日になると思います。なぜなら、たとえ地の表は震い動くとも主なる神の御言葉は固く立つということを実感なさったと思うからです。」というようなつなぎの言葉を語り、私の準備していきました励ましの辞を静かに語りました。そのときに心に浮かんだのが詩編 46 篇 2～4 節の御言葉「**神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。わたしたちは決して恐れない／地が姿を変え／山々が揺らいで海の中に移るとも　海の水が騒ぎ、沸き返り／その高ぶるさまに山々が震えるとも。**」とイザヤ書 30 章 15 節の「**お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある**」という御言葉でした。ただし、話をしながらも、これだけ強い揺れだからとうとう東京が震源地の大地震が起こったのではないか、この礼拝堂も古いので講壇の後ろの壁が倒れてきたら壇上の私たちはみなおせんべいになるな、などと思いました。けれども、天上から吊り下げられているたくさんのライトが優雅に横揺れし、なんとも不思議な美しさでした。式の終了後に、宮城県あたりで震度 7 の地震らしいとうかがいました。そのときには、さすがに神様の前に立たされていると実感していましたから、あー、あのスピーチの再開時に、旧約聖書のヨナのように「私の手足を捕らえて荒海に投げ込んでください」とどうして祈れなかったのだろうか、と神妙に深く反省しておりました。それから 3 日後の月曜日の夜に、街の表情が一変した仙台に何とか帰り着くことができました。私自身も夫も、この東日本大震災とそれに続く福島原発の事故に出会ったことから、その後の歩みを大きく変えられたと思っています。

さて本日は、受難節の第3主日になりました。そして、先ほど本日の聖書箇所を司式者が朗読したのをお聞きになっていて、特に22節の「**人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。**」の箇所などから、いよいよ主イエスの受難を深く覚える時期になったという実感をお持ちになった方もおられることと思います。この受難予告と呼ばれている御言葉は、マタイによる福音書とマルコによる福音書にも記されています。そして、三つの福音書に共通するのは、直前に「ペトロの信仰告白」と呼ばれる出来事が記されていることです。「**それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。**」という主イエスの問いかけに、共にいた弟子たちの中からペトロが「**神からのメシアです。**」と答えた有名な場面です。そのことをしっかりと見据えながら、本日は特に23節の「**わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。**」という御言葉に注目してまいりたいと思います。

ところで、日本語の「十字架を背負って生きる」という言葉には、「耐えがたいほどの苦難を負うこと」という意味がありますが、「自分の過去のトラウマを背負って生きて行く」という意味で使われることもあります。 けれども、いずれもキリスト教で用いる本来の意味とは異なっています。もともと「十字架」というのは、主イエスが活動しておられたその当時の必ず死に至らせるための処刑道具でした。ですから、本来のキリスト教の「十字架を背負う」ということは、「死に至ることを覚悟のうえで、すべてを捨てて自己を放棄して、神に従う」ということになります。自らを捨てるということは、自分の親や兄弟、持ち物、財産など、すべての「しがらみ」を捨てるということです。それらをすべて捨てて、神に従うということです。ですから、日本語で言われている「十字架を背負って生きる」ということとは、その言葉の重さが大きく異なっているのです。

主イエスは、多くの苦しみを受け、ユダヤ人から退けられて殺されることを弟子たちに告げられました。それが主イエスご自身の十字架です。そして、主イエスの十字架は私たちのためのものでした。主イエスは、ご自分のためではなく私たちのために十字架につけられました。ですから、その同じ十字架を私たちが背負うのではありません。私たちの十字架は、主イエスに従う生き方です。主イエスは、まず「**弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じ**」た後で、受難予告をされました。しかし、23節には「**それから、イエスは皆に言われた。**」とありますから、御言葉は、弟子たちだけではなく、すべての人にとって、そうすべき真実の生き方へと広がっているということになります。そして、「**わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたし**

に従いなさい。」という主イエスの言葉の中に「**自分を捨て**」「**自分の十字架を背負って**」「**わたしに従いなさい**」という命令形の動詞が重ねて用いられています。そこから、「自分の十字架」とは、私たちが自分自身で判断して選び取る「自分のための十字架」ではないことが明らかです。私たち一人ひとりに与えられている神様からの十字架ということになります。

そのように考えてくると、そんな大変なことは私にはとても出来そうにない、と私たちは考えてしまいます。けれども主イエスは 24 節で「**自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである**」と語っておられます。つまり自分を捨て、十字架を背負って主イエスに従うことは、本当の意味で自分の命を救うことになるというのです。なぜなら、この主イエスに従って共に歩むところでこそ、私たちは私たちの罪を引き受けて多くの苦しみを受け、排斥されて殺され、そして三日目に復活して下さった救い主と出会い、その救い主が私たちを愛していて下さり、私たちのためにとりなし祈っていて下さることを知ることができるからです。私はこのことから、マタイによる福音書 11 章 29 節 30 節で語られている主イエスの招きの言葉を思い出します。「**わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。30 わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。**」とあります。私たちが神様から与えられた自分の十字架を背負って歩もうとするときに、どのようにすれば良いのかがそこに示されているように思うのです。そして、ルカによる福音書だけが、そのような主イエスに従う歩みをするのは「**日々**」、つまり毎日毎日の日常のことなのだと語っているのです。そのことを、今年の受難節には心に刻みたいと思います。